

アレルギー性鼻副鼻腔炎に対するマクロライドと抗ヒスタミン薬の併用療法の有用性—CTによる評価—

田中紀充¹⁾ 松根彰志¹⁾ 吉福孝介¹⁾ 相良ゆかり¹⁾
積山幸祐²⁾ 茶園篤男³⁾ 首藤純⁴⁾ 黒野祐一¹⁾

1) 鹿児島大学病院耳鼻咽喉科頭頸部外科

2) 鹿児島生協病院耳鼻咽喉科

3) 茶園耳鼻科

4) 首藤耳鼻咽喉科

【はじめに】アレルギー性鼻炎は近年増加傾向にあるといわれておるが、その約35%に副鼻腔陰影を認める。一方、慢性副鼻腔炎の治療には、マクロライド少量長期投与が有効であるが、アレルギー性鼻炎を有する例では、抗アレルギー薬によるアレルギー性鼻炎の治療が基本とされている。しかし、その有用性の評価は単純レントゲン検査で行われており、その妥当性に疑問がもたれている。そこで、今回、アレルギー性鼻炎を有する副鼻腔炎症例での抗アレルギー薬にマクロライドを併用する治療の意義をCT画像により検討した。

【対象と方法】対象は、CTにて副鼻腔陰影を有し、かつダニ、HDによる通年性アレルギー性鼻炎を有する26症例（男性10名、女性16名、7歳から63歳、平均年齢36歳）である。対象症例を封筒法にて「(第2世代)抗ヒスタミン薬単独治療群」(以下、単独群)とクラリスロマイシン併用群(以下、併用群)の2群に割り付けた。治療開始前と3ヶ月の内服治療直後に、自覚症状、鼻内所見、副鼻腔CTの各検査を行い、改善度を両群間で比較検討した。

【結果と考察】自覚症状、鼻内所見、総合臨床効果の点で単独群と併用群とで差は認めなかった。ただし、副鼻腔陰影が高度な例では、マクロライドを併用した方が良い可能性もあり、CTによる副鼻腔陰影のパターン別での効果判定も併せて検討を加え報告する。